

静岡でヤツテみよう

まだまだある、初めてのこと



清水港

奥から、大川速巳さん、小久江理事長、杉山元太さん

ひまわり通信

Vol.11 2022.12.

“どんなに重い障害があっても地域で共に生きる社会”を目指して

発行：特定非営利活動法人 ひまわり事業団
静岡障害者自立生活センター

〒422-8006 静岡市駿河区曲金5-4-58
TEL: 054-288-6068 FAX: 054-287-4922
E-mail: himawari@scil.jp HP: <https://www.scil.jp>



最強アングラー決定戦！ ひまわり杯争奪 釣りバトル

10月14日(金) 午前11時

最強アングラーを決定する戦いの火ぶたが切って落とされた。

題して「第一回ひまわり杯争奪海釣り大会」。

エントリーしたのは、以下の計7チーム。

チーム名	1	2	3	4	5	6	7
チーム名	そやいや (伊達、小林)	さとう (伊達、大川)	さにい (伊達、杉山)	小久江 (伊達、理恵)	大川	杉山	りゅう (理恵)



RAUND1 ■am11:00~11:30

サカナいるじゃん！

現役アングラーや若い頃釣りをかじった者から、「釣竿を握るのは人生初めて」という超初心者まで、実に多彩なメンバーだ。

場所は、静岡市清水区の清水マリンパーク。エスパルスドリームプラザという人気商業施設のすぐ隣にある、港に面した公園だ。

ルールは単純明快。前半（11時～12時）と、後半（13時～14時）の計2時間の制限時間内に、いちばん多くのサカナを釣ったチームと、いちばん大きな

サカナを釣った者に「最強アングラー」の栄冠を与えよう…というものだ。

釣れたサカナの種類は問わない。食べられないフグだって同じ一匹にカウントされる。「数部門」と「大きさ部門」の優勝者にはそれぞれ、写真①のような豪華??な景品が用意されている。

それにしても、場所が蒙ダイだ。

ドリプラ（エスパルスドリームプラザのこと）に隣接していて人が多いし、近くには工場が立ち並んでいるし、港にはひっきりなしに船が出入りしている。海水は？と言えば、黒く濁んでいて魚影などどこにも見えない。車いすトイレ等の利便性を考慮すると



仕方がないことだが、こんな場所では、どう考えても釣れそうもないのだ。

「こんなところにサカナいないんじゃないの～」「いたとしても、とてもスレっていて、オレたちの針なんかにやあ掛からないよね～」誰もがそう思った時のことだ。

「釣れたアアア！！！」

さにいAチームの伊達が小さなマダイ（13センチ）を釣り上げたのだ。（写真②）

「おおっ！ サカナいるじゃん！」

RAUND2 ■am11:30~pm0:00

理事長が意地を見せる

さにいAチーム（伊達、小林）がマダイを釣り上げたことで、とたんにアングラーたちの心に火がついた。

「くそっ、負けてなるものか！」

しばらくすると、今度は小久江理事長の竿にアタリがあった。

「おっ、来たぞ！」

釣り上げてみると、カサゴだ。リュウがメジャーで体長を測ると12センチ。伊達のマダイよりわずかに小さい。

しかし、さらに10分ほどすると、再び小久江理事長がカサゴを

連続ゲエエ～ット！

今度は13.5センチ。（写真③）

これで「数」、「大きさ」二つの部門で、理事長がトップに躍り出たことになる。

さすが、小学生の頃、海釣り大会の常連だっただけある。

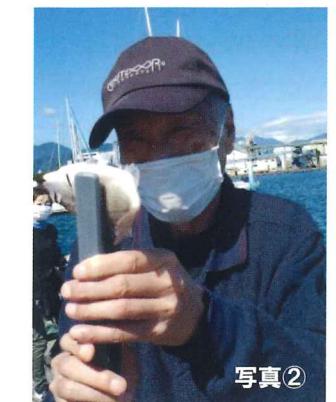
「ひまわり事業団の代表として、部下たちにやあ負けられないぜ…」理事長の意地を感じさせた瞬間であった。

それにしても、すぐ両隣で竿を握っていた大川と杉山の方はサッパリ…

「おいサカナ～、理事長だからって忖度（そんたく）するなよ～」大川がポツリとつぶやいた。



写真①



写真②



写真③



写真④

エスパルスドリームプラザ

静岡市民には「ドリプラ」でお馴染み、清水港に面した複合商業施設。映画館、レストラン、ショッピングモール、屋外遊園地等があり、一日中楽しめる。建物内はバリアフリーで複数の車いす対応トイレも完備している。



写真⑤



写真⑥



写真⑦

休憩 TIME

■pm0:00～pm1:00

ここで前半戦が終了。参加者たちは、すぐ隣のエスパルスドリームプラザにて、しばしの昼食休憩だ。

一方、記録班のOKUは、速攻で昼食を済ませると、そそくさとガスコンロと網を用意しはじめた。どうやら小久江理事長が釣った小さなカサゴを焼いて食べるつもりらしい。

前回のカヌー企画で、サカナを食べ損なっただけに、「**今日こそは食べるぞ！**」と執念を燃やしていたのだ。

リュウが慣れた手付きでカサゴをおろすと、OKUは網の上で塩焼きにして容赦なくパクリとたいらげた。ちょっと生焼け気味だったけど…（写真④）

ところで、昼の休憩タイムに、OKUはあるものを目撃してしまった。

それいゆチームの宮川がエスパルスドリームプラザ内の遊園地で、こともあろうにアンパンマン列車に乗ってはしゃいでいた宮川が15.5センチのカサゴを釣り上げ、いきなり「大きさ部門」でトップに躍り出たのだ。

誰もが思いも寄らなかった展開だ。聞くところによると、宮川は、今日の釣りが「人生初めての経験」だという

「こんな男に栄冠を譲るわけにはいかない！」釣り竿を握るアングラーたちの手に思わず力がみなぎった。

RAUND3 ■pm1:00～1:30

ダークホースあらわる！

さあ、お腹がいっぱいに満たされたところで、いよいよ勝負の後半戦だ。

さにいBチーム（花井、村松）は一発逆転をねらい、大きく釣り場を旋回させた。

ここまでのこと、「数（2匹）」、「大きさ（13.5センチ）」ともに理事長チームがトップだが、僅差での争いだけに、まだどのチームにも逆転のチャンスが残されている。

ところが、後半戦が始まつて間もないころ、思ひがけない展開が待っていた。

会場の一角で、突然キャッキャッ♥と歓声がこだました。ウム？ どっかで聞いた声だな…

OKUが声の主の方に振り向くと、それいゆチームの宮川だった。（写真⑤）

なんと、つい数十分まえにアンパンマン列車に乗ってはしゃいでいた宮川が15.5センチのカサゴを釣り上げ、いきなり「大きさ部門」でトップに躍り出たのだ。

誰もが思いも寄らなかった展開だ。聞くところによると、宮川は、今日の釣りが「人生初めての経験」だという「こんな男に栄冠を譲るわけにはいかない！」釣り竿を握るアングラーたちの手に思わず力がみなぎった。

RAUND4 ■pm1:30～14:00

終了間際の5分勝負！

思わぬダークホースの登場で、勝負は混戦の模様を呈してきた。

「数の部」トップは依然として2匹を釣り上げた小久江理事長だが、さにいAチーム、それいゆチームも、あと1匹釣り上げればトップに並ぶことが可能だ。

一方「大きさの部」では、先ほど15.5センチを釣り上げた宮川がトップだが、さほど大きさではないため、誰にもまだ逆転のチャンスが十分に残っている。

アングラーたちはおしゃべりを止め、真剣な表情で魚影を追いかけている。5分、10分、15分…しかし時間は無情にも過ぎていく。潮目は決していいとは言えない。むしろ釣れない時間帯だ。

残すところあと5分。

このまま、小久江理事長が逃げ切るか…と、誰もが思ったその瞬間。また、それいゆチームから、はしゃぐような笑い声が響いた。

「釣れた～～～♥」

「えっ、ウソだろ！」

なんと、今度はそれいゆチームの興津が、16センチ（本日最大）のギンポを釣り上げたのだ。（写真⑥）

これで、それいゆチームが、「大きさ部門」ではも

ちろんトップ、「数部門」でも理事長と同数で肩を並べることになった。

つまり、釣り初心者のそれいゆチームが2冠を達成することになったのだ。

それにしても、バリバリ現役アングラーのリュウや、釣り経験のある理事長や大川を差し置いて、休憩時間にアンパンマン列車ではしゃいでいた、それいゆチームに対して微笑むとは、釣りの神さまはなんと気まぐれであることだろう…

こうして2時間に及ぶ熱い戦いは終わった。

今回破れたアングラーたちは、自らの胸に雪辱を誓いつつ帰路についたのである。

さて、日を改めて

事務所で表彰式。

勝者の喜びいっぱい

の笑顔で、第一回

ひまわり杯争奪釣り大会は無事閉幕。

（写真⑦）第二回に乞うご期待。

文：奥村譲

最終結果

チーム名	魚の数	大きさ
えいゆ (宮川・興津)	2匹	15.5cm 16cm
さにいA (伴達・小林)	2匹	13cm
さにいB (花井・村松)	1匹	
トス江 理事長	1匹	12cm 13.5cm
大川	1匹	
杉山	1匹	
リュウ	1匹	



就労継続支援 B型

それいゆ

生活支援員

わたなべ みづき
渡邊 美月

保育士

4月よりひまわり事業団、就労継続支援B型それいゆで働くことになりました、渡邊美月（わたなべみづき）です。

以前から福祉には興味があり、アルバイトでヘルパーをしていました。毎週金曜日の大学終わりに、障害を持つ方の家に訪問し、ご飯を作ったり、お風呂介助をしたりしました。翌日には別の利用者さんとセノバで買い物や映画を観に行くなど、身の回りの生活から外出のサポートまで色々な経験をさせてもらいました。泊まり込みの支援の翌日に外出支援にいく…またその当時は長泉町に住んでいたので違うのも時間がかかり、すごい体力があったなと思っています（笑）

ひまわり事業団とは、大学当時のゼミの先生の繋がりで、それいゆの方たちとの出会いが携わるきっかけとなりました。そこから、ボランティアとして毎年開催されているアートイベントへの参加や、大学の食堂で一緒に会食をしたり、ディズニーランドへ行ったり、楽しい思い出と一緒に共有しました。

今でも、写真フォルダを見返しては、利用者さんの楽しそうな姿に、ついつい笑みがこぼれてしまいます（笑）またあの日みたいに、それいゆのみんなでどこか楽しいところへ出かけたいな…なんて思っています。

それいゆの利用者さんの働く場を見たときに感じたのは、みんなが生き生きと自分のやりたいことを見つけ取り組んでいて、また仲間たちが受け入れていています。1人ひとりが得意とするものがあって、それを尊重した仕事が任され、自分のペースで働い

ている、そんな場所だなと感じました。ありのままの自分を表現することができ、それを受け入れてくれる仲間や支援員がいる、そんな自分らしくいられる“居場所”になっていると感じました。

自分のことを話すのが苦手で、つい仕事関係の話が長くなってしましましたが、少し自分のことについてです。小学生から大学までバレーボールをやっていました。最近は体を動かす機会も減り、全然ボールにも触れてないのですが、また何かしらスポーツなど体を動かすことに挑戦できればな…と思っています。面倒くさがり屋なので、気長に趣味を探していきたいです。

また、小さな頃から猫が大好きで、道端で猫を見つけては喜んでいました。大学2年のときに出会った子猫が、今ではモフモフの大きな子になり実家で暮らしています。静岡市に引っ越してきてからは、なかなか会えず、またペット禁止の賃貸なのでモフモフ不足で猫カフェに行ったり、実家の猫の写真を毎日送ってもらいモフモフ欲を満たしています。でも、やっぱり猫との暮らしをしたくて、いつか猫ちゃんも楽しく暮らせるような家に住みたいなと思っています。

話は戻りますが、今後もアート活動をはじめ、服飾雑貨の制作、食物の栽培、ファッショモデルなど、色々ことに挑戦するそれいゆの一職員として、ひまわり事業団の一員として利用者さんの活動を応援していきたいなと思っています。

今後ともよろしくお願ひいたします。

障害者の防災・避難・被災後支援はどうする？

～台風15号の経験から～

毎年12月に行われる防災訓練では、障害者が避難所で安心して過ごせるよう備品を配備したり、受け入れ時の留意点を確認したりすることを協働して行っている。

まだまだ地域の避難所のバリアフリー、福祉避難所とは言い難い避難所も数多く見受けられる。

また、今回の台風15号を経験し、災害時の避難経路の困難さや障害者の被災後の支援体制（在宅、単身生活の障害者の水や食料の支援、断水・停電等によるトイレや入浴の支援 etc…）の足りなさ等、多くの課題が浮き彫りになったと思う。

障害者自身が普段の日常から準備しておく物品や避難計画などの自助努力とともに、地域内での声掛けや民間事業者（宿泊施設や銭湯施設のバリアフリー化）、行政による支援制度や水や食料、医療現場との連携によるカテーテル等の日常生活用具の確保などの公助体制の構築など、やはり、障害者の防災・避難・被災支援は課題が山積している。

※左下写真は静岡新聞より

障害者の防災に関わる助成のご案内

正式名称は、日常生活用具「地震防災用具」で、身体4級か療育A以上なら5万までの購入補助申請ができます。一度この制度を使ったら、5年後にまた申請できます

5万円の防災用品購入で、ポータブル電源等が購入できます。

例1) ポータブル電源+防災ラジオ 合計5万円
例2) 簡易エアベッド+防災トイレ+非常用導尿セット 合計3万円

※値段は一般的な参考例

食料と水以外の防災に関連するものであれば購入申請ができますが、ゲーム機のような明らかに防災とは無関係な物はダメです。

就B それいゆ × 静大生

今年は、一緒に描く！
それいゆメンバーと静大生が一緒に過ごし、
一緒に描き始めたら、どんなことが起こるのか!?
昨年の展示を見て興味を持ってくれた静大生の有志メンバーと
それいゆの、面白くて楽しいコラボレーション！！



昨年に引き続き、今年も静大生とのコラボ展示を行います。

昨年は、それいゆの作品を学生さんが展示することでお互いが表現者になりましたが、今年は「一緒につくって、出来上がったものや制作中に感じたことから、展示を考えて行く」というような構成になっています。

静岡大学教育学部 美術教育専修の高橋先生をはじめ、有志の学生さんが9月からそれいゆに足を運んでくださり、それいゆのメンバーと一緒に作品づくりを楽しんでいます。

最初はお互い緊張気味でしたが、回を重ねるごとにその距離が近づき、自然な形でお互いが制作に溶け込み、影響されながらの作品づくりになっています。

肩を並べて、それぞれが描きたいものを描いていたり、外で勢いよく絵の具を塗ってみたり、その傍らで自分の作品づくりに没頭していたり、そんな中でいつもと変りなく内職を行う方がいたり・・・

ひとりひとりのスタイルを尊重して成り立っているそれいゆを、展示を通して伝える事が出来たら嬉しく思います。

今年のタイトルは
「アートをつくる日常—遊び場の宇宙—」です。

11月21日（月）～12月8日（木）まで、静岡大学付属図書館静岡本館ギャラリーで展示されます。

***** 学外の方の入場が出来ません *****

次号で、高橋先生のインタビューと一緒に展示の様子をお伝えしたいと思います。

文：鈴木梨可



なな～らの外出 秋の日本平動物園

11月、なな～らの住人さんを2チームに分けて動物園に出かけました。

16日に出掛けたチームはマイペースな方が多く、いつもより1時間早い出発に支度が間に合うのか支援員もドキドキでしたが、意外にも予定通りの出発ができほっとしました。

まずはお弁当選びから、車内で支援員が「今日はどこのお弁当が良い?」と聞くと皆から「天神屋~!」天神屋さんの秋の味覚がいっぱい詰まつたお弁当を買い動物園へ向かいました。動物園に着くなり「どこで食べる?」とちょっと食いしん坊なグループでした。

23日のグループに「何がみたい?」と聞くと、「キリンが見たい!」との声が返ってきましたが、テレビのニュースを見て知っていたのか、先日、キリンの「ダイヤ」(雄5歳)が亡くなってしまい、当日はキリン舎の前で、皆で手を合わせて

冥福を祈りました。

昨年は「サクラ」(雌7歳)が亡くなり日本平動物園にキリンが1頭もいなくなり残念です。

気を取り直して、皆は久しぶりの動物園で象のダンボに挨拶したり、虎とにらめっこ?したり、レッサーパンダを追いかけてと楽しい時間をやつたりと過ごしました。中でも白くま「ロッシー」の泳ぎに迫力を感じて水槽にくぎ付けのTさんがいました。修学旅行生や一眼レフカメラを持った学生グループ、子連れの親子など時間を追うごとに沢山の方が動物園に訪れていました。

日本一長いローラースライダーに挑戦したいという声もありましたが、台風の影響でメンテナンスの為、お休みでした。また次回を楽しみにしたいと思います。

両日共にとても良い天気だったので、帰りは日本平の山頂から清水の町を一望し、紅葉した山と久能の海岸を見ながらなな～らに戻りました。

文：清水かおり



さにいの外出 ザ・リベンジ! 釣り大会 in 清水港

先日のひまわり事業団主催の釣り大会!(本紙巻頭)たくさんの魚を釣ってやろうと意気込み約2時間、釣り針を垂らし続けるも「さにい」の結果は1匹!(笑)

これでは不完全燃焼だ、と言うことでリベンジの時を誓い、早速日程を調整して約1か月後出かける事に。利用者さんと新しい釣り針を買いに行き、餌もどれが良いか悩みに悩んで購入し、準備は万端!

当日、天候は少し暑さを感じるほどの快晴で、風もほとんど無く絶好の釣り日和。そして、釣りポイントは今回もエスパルスドリームプラザ周辺で午前10時30分頃から6名の利用者さんとスタート!並々ならぬ思いで握る竿には力が籠り、じっ…と海に居る魚を凝視。今日は釣れるかなあ? そんな淡い期待と不安が入り乱れる中、開始15分で早くもヒット!

リベンジに燃えるみんなの思いが通じたのか、カサゴが釣れました。これは幸先が良い、と引き続き

釣り針を垂らし続けるも残念ながら午前中はこの1匹のみで、そのままお昼休憩に。

お昼ご飯はドリームプラザのフードコートで食べたり、お弁当を購入したりして、みんなで楽しく食べました。その後、13時ごろから釣りを再開!

のんびと外の空気や景色を堪能し、「ぼ～っとする時間も悪くないね。」なんて皆で話しながら再び垂らす釣り針は、うんともすんとも言わず、あつという間に残り時間も15分を切ってしまいました。やはり、そう簡単に釣れるもんじゃないな、と考えていると竿に当たりがあったのか!!! 大きな声が!! 慌てて支援員が駆け寄り利用者さんと一緒に焦らず慎重に釣り竿を引き上げました。そして、そこには何と! 前の釣り大会でも見たことのない大きなアジが釣れていきました! これにはみんな大喜びで記念の撮影会が始まりました(笑)

もう思い残すことは無いと帰る支度をしようと立て続けにヒットが! 結果的にカサゴが3匹とアジが1匹の十分過ぎる成果を得ることが出来ました。リベンジを果たすこと出来、意気揚々と帰る利用者さん達の笑顔を見て、今回の企画は大成功でした。本当に釣れて良かった…(笑)

文：吉岡佑真



2022年10月29日(土)、コロナの影響をうけ開催延期となっていた「ひまフェス」を3年ぶりに開催することになりました。今回のテーマを「地域の方々にひまわり事業団を知ってもらう」～楽しいイベント～として大勢の来場を望みつつ、コロナ感染の不安と向き合いながらの準備となりました。

委員会発足直後もまだまだコロナの影響があり、本当にやれるのだろうか、せっかく企画しても潰れてしまう企画になるのではと、やる気の出ない状況からのスタートでした。そんな中、世間では行動制限の規制緩和から徐々にイベントが復活し始めていたので、事業団で集団クラスターや災害が起こる以外は決行すると決まってから委員会メンバーが本格的に動き出しました。

今回のメンバーは、私の他に入職5年未満の職

員で計9名。私は委員長に任命されたものの、3年以上前のひまフェスを知らないメンバーが多く少し不安もありましたが、想像以上の企画になりました。各部との懸け橋となり、メンバー同士の交流と大きな目標を成功させることができほっとしました。

当日は、天気も良く絶好のひまフェス日和となり、オープニングは「それいゆ」の利用者さんたちのギター率いる演奏隊とダンスで始まりました。11時から14時までの3時間で、約150名の来場者があり大盛況となりました。各ブースではバザー、ボッチャ、アート展、ワークショップ、車イス体験、ヨーヨー釣り、また4つの協力事業所の物品販売と賑やかな催しとなりました。ボッチャでは利用者さんとお客様が対決しながらの体験で白熱する場面もありました。協力事業所の

出店ショップでは「ライク」さんから和菓子やカレー等、「まめったい」さんからシフォンケーキや手芸品、「ザクト」さんからはチョコレート、「キヤンバス」さんからはコーヒー豆と淹れたてコーヒーの販売、また車いす体験ブースでは予想以上の体験希望者で大盛況となりました。バザーもチラシの配布効果や事前の周知効果で、近所の方々が多く訪れてくれました。今回は地域との関りということで、お弁当は「肉のいちの」さん、「大地」さん、「惣菜文香」さん、スタンプラリーの景品に「松永豆腐店」さんのドーナツを使いご協力いただきました。チラシ貼りの場所の提供や回覧にご協力してくださった御町内の皆様に感謝いたします。

ひまフェスへの感想も「車いすに初めて乗り、難しかった」「貴重な体験ありがとうございました」「沢山の体

験が子供たちと体験できてよかったです」「ボッチャが意外と難しかった」「出店者さんも魅力あるお店ばかりで良かった」「楽しい企画ですね、コロナが一休みで良かったです」「あたたかい雰囲気で素敵なお祭りでした！」等々、沢山の温かい言葉をありがとうございました。

コロナ禍の企画ではありましたが、事業団全体の力で無事ひまフェスを成功させることができました。また、反省点もいくつかありましたが、次回のひまフェスをより良くするために改善点として活かしたいと思います。近隣住民の方、関係者様本当にご協力ありがとうございました。

実行委員長 清水かおり

委員 小柳恵 褒田雄大 山根夏実
岩崎仁美 吉永瑞季 下川禎枝
比嘉晴知 真田妥世子

追悼

田中克博さん

「カツちゃん」と私、そして、ひまわり寮の仲間がいた時代ー

奥村 譲

“カツちゃん”こと田中克博(かつひろ)さんが、9月9日に亡くなつた。

カツちゃんは、脳性マヒの障害者で、1970年代の終わりにナベさん(渡辺正直)・ゴンジー(後藤匡弘)らとともに、障害者の自立生活運動に身を投じ、ひまわり事業団(静岡障害者自立生活センター)の礎(いしづえ)を築いた人物のひとりである。

私がカツちゃんと初めて出会ったのは、40年以上も前。私がまだ20歳の大学生の頃、「ひまわり寮」という名の、障害者たちが共同で生活する寮においてだつた。

当時は、障害者に対する差別と偏見が社会に根強くはびこり、障害者が生活できる環境は、親の庇護のもと自宅で過ごすか、人里離れた施設に入所するか、のどちらかに限られていた。

そんな時代に、カツちゃんを始めとする数名の障害者たちが、決死の覚悟で施設や親元を

飛び出し、もと社員寮だった空き家を借りて住み着いたのが、当団体のルーツとも言える「ひまわり寮」(1979年設立)である。

寮とはいっても、風が吹けば飛んでしまった。いそうな木造のボロ屋で、床や壁はシミやキズだらけ、玄関のあたりには常にトイレ臭が漂つていた。

当時は、公的に保障されるヘルパー制度は皆無で、障害者の介護はすべてボランティアの手に委ねられていた。

寮には、そうしたボランティアだけでなく、活動家、宗教家、学生、主婦、地域の人、特に用もないけど、ぱりり立ち寄る人:毎晩、実際に雑多な人たちが出入りして、時には酒を酌み交わし、時には口角泡を飛ばして議論をした。若い女性を口説く目的の者もいれば、徹夜マージャンが目的の者もいたし、議論が沸騰するあまり取組み合いのケンカが始まることもあつた。

一方、寮に住む障害者たちは、ある者は車

私とカツちゃんなどが最も濃密な時間を過ごしたのは、この時代だ。

大学を休学し一年間を水俣で公害病患者たちを支援するボランティアとして過ごした後、静岡に舞い戻った私は、寝袋ひとつで自立生活センターの事務所に転がり込んだのだ。

復学したとは言え、相変わらず大学にはほとんど足を運ばず、事務所に居候させてもらう“見返り”として、日中はセンターの活動を手伝い、夜は障害者スタッフの介護をした。

私は、カツちゃんとリヤカーを引いて段ボールや古新聞を回収し、バザー物品の寄付をお願いするために市内の企業をひとつひとつまわつた。

時には、カツちゃん宅に招かれて夕食をご馳走になつたり、“秘密フィルム”的上映会とやらに誘われたりもした。

その後、私は6年かけてようやく大学を卒業したが、相変わらずマトモな就職はできず、バイトでお金が貯まつたら海外を放浪し、帰国すればまた自立生活センターに身を寄せる…といった体たらしくであつた。

そんな私は、よくカツちゃんから叱られた。「お前はいつまでフランフランしてるんだ…今後、どうやって生きいくつもりなんだ…」



右端が田中克博さん

し草)のような生活ばかりおくる私と、“障害当事者”として目の前の現実から逃げられずに地を這うような生き方をするカツちゃん。今振り返つてみると、あの頃の私たちは対極にあつたからこそ魅かれ合つたような気がする。

その後、カツちゃんは、「どろんこ作業所(1989年)」を設立するものの仕事中に大怪我を負つたことをきっかけに、1995年静岡を離れ、大阪で自立生活運動を再開することになる(2013年に静岡に戻る)。

ひとりの人間の生涯を振り返る時、こちらの都合で勝手にある時代のみに焦点を当てるのは、当人にとっては甚だ迷惑なことかも知れない。カツちゃんには、ひまわり寮の仲間たちから離れた後にもさまざまな人生があつたし、それは私においても同じだ。

だが、あの一時期、私とカツちゃんを始めとするひまわり寮の仲間たちの人生が一瞬交錯し、濃密な時間を過ごしたことは生涯忘れられない。



とおるのトーク

11月ジブリパークができる、元気があってヘルパーがいれば、一度は行ってみたいものだ。名古屋でも少し離れた場所にある。静岡からだと行くだけで2時間強かな？最近ステイホームの癖がついて近場で楽しんでいる身には、ちと遠い。しかし、いつかは行って、猫バスに乗りたい。

それはさておき、近くに買い物に行ったらマリオの仮装で楽しそうに子供が歩いていた。ハロウィン過ぎたらやっと秋だなあという日が来た。今年は9月に台風で停電と断水があり、我が家も夜中にCPAPもベッドも動かなくて困った。泊まりのヘルパーがいる日だったのも運が良かった訳だけれど、幸いその日の夜には電気水道ともに戻った。それほど暑い日ではなかったが、エアコンは使えずベッドも動かずで電気エネルギーの有難さが身に染みた。市内では、床上浸水被害や車が水没して買い替えた人もいたし、断水が続いた所もあったらしく、避難所での生活もままらない僕は、もしものことを考えてしまう。深刻なことだな。さりとて人生なるようにしかならない訳だけど。

その台風後の気象がおかしくて、寒くて長袖着ると翌日はどう考えても半袖の陽気で、おかげで衣替えも出来ないままハロウィンになってしまった。そんな異常気象は蚊にも及んだらしくて、今年は蚊にお目にかかるないと調べてみたら蚊も30度を超えると活動しなくなるようです。生態系にも温暖化が影響してるんですね。ちなみに去年も同じように急に寒くなって10月17日にファンヒーターを出している。季節の進みが年々早くなりつつある。

12月このコラムが印刷されて配付される頃、我が家にもアイスクリスマスケーキが届くはず。冬って楽しみがたくさんある。大道芸だとか、青葉公園のイルミネーションだとか…。今年は16年振りのDr.コトーの映画もあるんだな。これで、一部のヘルパーから寒いと文句がなければハッピーなのにな。冬が越せない夏が越せない、何時なら越せるんだろ。聞くだけでも結構ストレスになるんで、今年はヘルパー用の石油ヒーターを用意した。それでも中には骨折でも散歩を行ってくれる人もいる。なので時と場合によってだがヘルパーを使って暮らすのもある意味それほど楽ではないんですね。気は使いお金も使い。大変ですよ。他のヘルパー利用者はどうしてるのかな？聞いてみたい気がしないでもない。

ウクライナに侵略戦争をロシアが仕掛けて10ヶ月、冬のキーウは氷点下、想像もできないことが2月から続いている。日本のマスコミはなぜかウクライナ情勢に消極的だ。優先順位が統一教会に傾いてはいないか？統一教会と自民党の癒着ぶりにはあきれるが、ウクライナで何が起きているのかの報道をする義務も報道機関にはあると思う。ウクライナに平和が来ることを願ってコラムを終わる。

文：橋本徹

障害を持つ人の生活を支援する
ヘルパー
募集中
お気軽に
お電話ください
054-287-1230

【編集後記】今年は、「ひまフェス」を3年ぶりに開催することができ、職員および福祉関係者、地域の皆さん、当日ご参加いただいた多くの皆さんには心より感謝申し上げます。今回は入社5年未満のメンバーを中心に実行委員会をつくりました。とてもフレッシュな感覚で運営され、ひまフェスの新しい出発になったような気がします。一方、特集の「釣りバトル」では、私自身も参戦させていただきました。初めてサカナが釣れた時の喜びを、誌面から感じて頂けると幸いです。今後も、障害者が社会で活き活きと暮らす様子を、機関紙を通して発信し続けたいと思います。

最後になりますが、追悼記事にあるように、当団体創設の頃の貴重な仲間をまた一人失いました（田中克博氏）。心よりご冥福をお祈りいたします。

文：理事長 小久江寛